
あの日、あの時。

紗希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、あの時。

【Nコード】

N1837B

【作者名】

紗希

【あらすじ】

突然の手紙。哀はすべてを捨てて組織へ戻るのか。それとも、愛する人と共に生きるのか。哀の複雑な心境を綴ったシリアス・ストーリー。（ラストはシリアスじゃないかも。）

FILE 1：手紙（前書き）

初！組織ものです・・・。

心配なので、読んでみておかしい点などありましたら
評価と共にお聞かせください・・・

FILE 1：手紙

これは、組織によるあの暗殺劇から数日たったある日のこと・・・

いつもの様にポストを覗く。

博士宛の手紙や、ダイレクトメールが入っている。

博士の頼んだダイエット食品のサンプルなんかも入っていた。

（まったく・・・こんなものばかり頼んで・・・）

そんな事を呆れていると、ポストの奥から宛名の無い

黒の封筒が出てきた。

「なにかしら・・・？」

その時、私を計り知れない程の恐怖が襲った。
あのバスジャック事件の時のような。

不安を胸に家に入り、ソファーに座り、その手紙を開ける。

『親愛なるシェリーへ』

我々は今、ある薬の開発を進めようとしている。

お前の父親と母親が作っていた薬だ。

だが、お前の両親が死んでからは研究が滞っていた。

そこで、お前の力を借りたい。

もしもお前が組織へ戻ったら、お前の傍の奴には

手出ししない。

もしも戻る気があるなら、明日、米花センタービルで待っている。

『ジーン』

私の顔は、
みるみるうちに青ざめていった。

FILE 1：手紙（後書き）

お読みいただき、有難うございます。

組織ものは初めてなので、不安で不安で・・・

感想・評価、お願いします！！

さあ、次回は哀ちゃん組織に行くかどうか、

決意します！！

駄文で申し訳ありませんが、最後までお付き合いください・・・。

FILE2：守るべきもの（前書き）

投稿、遅れました・・・

今回は、少年探偵団も登場します。

FILE2：守るべきもの

突然のジンからの手紙。

恐怖が私を襲った。

私の両親がやっていた研究・・・

私は、研究を継いで組織に戻るべき？

それとも、みんなの傍にいたべき？

出来る事なら、みんなの傍にいたい。

でも、私が組織に戻ったら

工藤君は元の姿に戻る。

蘭さんと一緒に過ごせる・・・

私は迷った。

自分の幸せを取るか、

愛する人の幸せを取るか・・・。

いつもの朝。

昨日とは全く違う、爽やかな朝。

昨日の事なんて、無かったような朝。

いつもの様に、あの子達と一緒に登校する。

「おはよー！哀ちゃん！」

吉田さんの、明るい挨拶。

「おはよう。」

いつものような、素っ気ない返事。

「なあ光彦、今日の給食、カレーだぜ！」

「もー、元太くん。朝から給食の話ですか？」

いつものような、何気ない会話。

「まったく、お前ら朝からうるさいぞ。」

あのひと
彼が欠伸をしながら言った。

そこには、いつものような笑顔があった。

いつものことの筈なのに、

私にはとても眩しく感じた。

『この笑顔を守りたい』

そう感じた。

そして、決心した。

—組織に戻る事を—

FILE 2：守るべきもの（後書き）

どうも！紗希です。

どうでしたかね・・・今回。

なんか心配なんですよ・・・

連載2話目にして、早くもスランプ！？

次回からは、もっと良くなる様に頑張ります。ハイ。

感想・評価、入れてくださった皆様、本当に

有難うございます！

そのほかの皆様！私のパワーの源ですので、感想・評価の方も

お願いします*^-^*

FILE 3：涙（前書き）

サブタイトル、微妙ですね・・・

そして、哀ちゃんの瞳に涙が・・・！

FILE 3：涙

『私は、あの笑顔を守りたい』

私は決意した。

組織に戻ることを。

愛する人の幸せを選ぶ事を。

私にはもう、幸せになるすべはない。

私が作った薬のせいで、工藤君の幸せは奪われた。

それでも彼は、私のせいじゃないって言うてくれた。

私が組織に戻れば、解毒剤が手に入る。

そうしたら、工藤君は元に戻る。

蘭さんと一緒にいられる。

幸せになれる・・・

だけど、工藤君や博士に言ったら

絶対に止められる。

「俺も一緒にたたかう。

だから、ひとりで行くな。」

絶対にそう言われる。

だから、この事は誰にも喋ってはならない。

私一人だけの秘密。

誰にも内緒で待ち合わせの場所へ行かなくてはならない。

ジンが迎えに来るのは、明日。

明日で、みんなに会うのは最後。

少し、寂しかった。

そして私は、組織での生活に必要な最低限のものを用意した。

今まで研究していた薬のデータ。

洋服。

お姉ちゃんとの写真。

そしてもう一つ、用意しなければならなかった。

工藤君や博士に残す手紙。

わたしは、手紙を書き始めた。

泣いたことなんて滅多に無かったのに、

その時だけは

涙が零れた。

FILE 3：涙（後書き）

どーも！紗希です

哀ちゃん、泣かせてしまいました・・・
すみません・・・

さて、どうでしたか？

次回は、ジンと対面します。
そしてコナンが・・・！

評価・感想もお願いしますm - - m

FILE 4：最後の夕焼け（前書き）

今までのサブタイトル変えました。
（内容は変わってません）

FILE 4：最後の夕焼け

―そして訪れた、最後の日―

「おはよー！哀ちゃん！」

「おはよう。」

私は、出来るだけいつもと変わらない態度で接した。

吉田さんの笑顔には、いつも元気付けられたわね……。。

「吉田さん、いつもありがとう。」

歩美は驚いた。

「どうしたの？哀ちゃん。いきなりそんな事。」

「なんでもないわ。言ってみただけ。」

いつもと違う哀の様子に、コナンも疑問を抱いた。

「おい、お前どーしたんだよ？らしくねーぞ？」

「なんでもないわよ。いつもの通りだけど。」

「そーかあ？」

私はいつもの私を装っての、彼との会話。

ほんとは彼にすべて話してしまいたい。

でも、それは出来ない。

彼の幸せが奪われてしまうから・・・

私はその後、いつもの様に授業を受け、いつもの様に下校した。

「なあ、今日サッカーしねえか？」

「僕はいいですよ。」

「歩美もやるー！」

「ゴメン、私、パス。」

ほんとは一緒に居たかった。

みんなの暖かさに包まれていたかった。

「じゃあね。バイバイ・・・」

私はみんなに背を向けた。

「なんか哀ちゃん、遠くに行っちゃうみたいだね・・・」

（灰原・・・？）

残された四人は、哀の背中を見つめていた。

街を染める夕日が、私の心に染み込んできた。

私は走り出した。

後ろは振り向かなかった。

みんなの暖かさに、涙が零れそうだったから・・・

FILE 4：最後の夕焼け（後書き）

どうも。紗希です

意味不明です。今回・・・（自覚してます・・・）
大した展開なしですか・・・

次回は頑張りますd（・w・）b

評価・感想もおねがいしますね！

紗希でしたあ！！

FILE 5：突然の来訪者（前書き）

書き忘れていました・・・
一応、季節は冬です！

FILE 5：突然の来訪者

その晩、哀は最後のときを過ごしていた。

（これでもう、工藤君や博士達とお別れなのね・・・）

そんな想いに耽っていた。

いつの間にか、雪が降り出していた。

ボンボン

10時を伝える鐘が鳴り響いた。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

(こんな時間に誰かしら・・・)

そんな事を思いながら、扉を開ける。

そこには、雪まみれになった彼^{あのひと}がいた。

「工藤君!？」

私は思わず声をあげた。

「よお、灰原。」

「『よお』じゃないわよ。今何時だと思ってるの?」

「わりい、わりい。」

彼は、手を合わせていった。

「まあいいわ。中に入りなさい。」
そういつて、彼を家の中に入れた。

二人はソファーに座った。

「なあ、博士は?」

「もう寝てるわよ。」

「それより、何よ?こんな時間に。」

私は少し怒った様に言った。

「なあ、お前なんか変じゃないか?
今日だって、遊ぶの断って
一人で帰ってっただろ。」

「そんな事無いわよ。」

私は、あのことを彼に悟られないようにいつもの様に言った。

でも彼は疑ったまま。

「ほんとか？何か、隠してないか？」

私はもう、平静を装っていらなかった。

「私は大丈夫だから！もう帰って！」

私は声を張り上げて叫んだ。

「分かった。お前が言うんだから信じるよ。
でも、何かあるんだったら俺にいえよ。
お前の事守るって言ったから。」

そして彼は帰っていった。

閉まったドアを見つめ、私は悲しくなった。

そして、大切な人に嘘をついてしまった自分を恨む。

そして私は家を出た・
・
・
・
・
・

FILE 5：突然の来訪者（後書き）

どうも！紗希です（・O・）＃3

哀ちゃん怒らせてしまいました・・・

どうでしたかね、今回。

ジンとの対面を引き伸ばして引き伸ばして

遂に次回、対面します！！！！

お楽しみに（笑）

評価・感想と共にアドバイスなどいただけると
嬉しいです！宜しく願いしますm（・ー・）m

FILE 6：再会（前書き）

どうも！更新遅れてすみません。

FILE 6：再会

私は、白い雪が降る通りを歩いていく。
米花センタービルに向かって。

私は不安になった。

私はこれから組織で暮らしていけるのか。
ただでさえ、一度組織を裏切った身。

組織の一員になったところで、受け入れてもらえるのか・・・

米花センタービルに着いた。
そこには、長い銀髪を夜風に靡かせ、
自慢の愛車にもたれ掛かっている
黒い影・・・

ージン

私はその冷酷な瞳^めに怯えた。

そしてジンに向かって、一歩前へ出た。

ジンは私に気付くと、方頬をあげた。

「やっと会えたな、シェリー。」

感情の無い言葉^{こえ}。

「ええ、久しぶりの再開ね。」
私はジンに負けなくらいの声で言った。

「行くぞ。乗れ。」
そう言っでドアを開けた。

車に乗ると、ジンが私に問いかけてきた。

「なあ、お前が組織のガス室から消え失せたカラクリ、教えてくれないか？」

「秘密よ。」

私は当然の様に答えた。

「まあいい。」

次は私が問いかける。

「ねえ、ほんとに解毒剤くれるんでしょうね？」

「ああ。お前が組織に戻ってきてくれるならな。
但し、分かっているとは思うが二度と抜けられないがな。」

私は、唇をかみ締めて言った。

「ええ。覚悟はついてるわ。」

「そうか。手紙にも書いたが、お前には薬の研究を継いでもらう。」

「お父さんとお母さんがやっていた研究ね。」

私は確かめるように言った。

「そうだ。」

やっぱり感情の無いジンの声。

「着いたぞ。」

その声で顔をあげた。

そこには、高く聳え立つ組織のアジトがあった。

—これから私の組織での生活が始まる—

FILE 6：再会（後書き）

紗希です！

この出来の悪さは・・・最悪です・・・（泣）

また、次から頑張ります！！

評価・感想のほうもよろしく願います！！

紗希でしたあ！

FILE7：ラム（前書き）

この話では、ジンは組織の上層部のお偉いさん、といった設定です。
それでは、第7話をどうぞ！

FILE7：ラム

高く聳え立つ組織のビルは、表向きはごく普通の会社。サラリーマンなどが忙^{せわ}しく出入りしている。私が組織にいたときは違うビルだ。

「行くぞ。」

ジンの声で現実に取り戻される。

そしてジンに連れられ、ビルに入ってしまった。

ビルの中は至って普通だった。

ジンはエレベーターに乗った。

エレベーターは、55階で止まった。

そして、「薬品研究課」と書いてある扉の中に入ってしまった。

その部屋には、白衣を着た研究者達がパソコンや試験管など向き合っていた。

突然入ってきた私達に、厳しい視線が向けられた。

だがジンを見るとすぐにもとの仕事に着いた。

「お前にはここで働いてもらう。不便な事があれば、薬品^{くすり}研究課の奴らに聞けばいい。まず、この長にいろいろと聞いてみたらいい。」

それだけ言って、ジンは部屋を出て行った。

私が入ってきたにもかかわらず、研究者たちは黙々と仕事に向かっていた。

私はジンに言われた通り、この部屋の一番奥にある机^{デスク}に向かった。

そこには、大柄で眼鏡を掛けた男が座っていた。
その男は、私を見ると

「君が、宮野君かね。私はこの長のラムだ。
君のことはジンから聞いている。

一度、組織を裏切ったそうじゃないか。」

その言葉で、私は言葉が詰まった。

「まあいい。今日から君にはここで働いてもらおう。
だが、その姿では色々と不便だろう。
君には、これを飲んでもらおう。」

その男、ラムは一つの薬を私に差し出した。

「これは・・・？」

「APTX4869の解毒剤だ。君も分かっていると思うんだがね、
君がこの薬で体が縮んだってことは組織の調べで分かっていたのだよ。」

もちろん、工藤新一の事もね。」

私は驚いた。

（まさかそこまで分かっていたとは・・・
組織を甘く見ていたかもね・・・）

「まあ、早く飲めとは言わん。君の心の準備が
出来てからでいいんだがね。」

ラムはそう言った。

私はその薬を受け取り、ラムに言われた机に向かった。

私は迷った。灰原哀から宮野志保へと

シェリー

戻るといふ事を。もとの体に戻るといふ事は、完全に組織の一員になるという事。

灰原哀として過ごした楽しい日々は失われる。

私はふと、窓のほうへ視線を向けた。

赤く染まった夕日が輝いていた。

もうすぐこの会社を裏の顔に変える夜がくる・・・

FILE7：ラム（後書き）

こんにちは、紗希です。

更新遅れました。大した進展はなかったですけど、次回は久々のコナン君を登場させる予定です
感想・評価のほうもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1837b/>

あの日、あの時。

2010年10月22日00時14分発行